

臥龍山で保護されたアカショウビンの巣立ち前後における 形態・行動の変化

畑瀬 淳^{1)*}・野田 亜矢子¹⁾・上野 吉雄²⁾・白川 勝信³⁾

¹⁾ 広島市安佐動物公園・²⁾ 認定 NPO 法人西中国山地自然史研究会・³⁾ 芸北 高原の自然館

Behavioral and Appearance Changes Pre- and Post-independence in Rescued Fledgling Ruddy Kingfisher at Mt. Garyu.

Jun HATASE, Ayako NODA, Yoshio UENO and Katsunobu SHIRAKAWA

はじめに

アカショウビン *Halcyon coromanda major* は本州、四国、九州の落葉樹林で繁殖する夏鳥である。広島県では、庄原市西城町の「広島県民の森」や西中国山地一帯で、比較的多く観察され、北広島町八幡の臥龍山 1,223m も繁殖地として知られている。臥龍山では、その中腹以高のブナ林において毎年繁殖が確認され、多くのバードウォッチャーや写真愛好家はその様子を観察している。2021 年 7 月の豪雨によりアカショウビンが営巣する枯木が倒壊し、繁殖が中断された。営巣木が倒壊した翌日以降、北広島町によって営巣地跡周辺で巣立ち前の雛 4 羽が保護され、広島市安佐動物公園に持ち込まれた。保護後数日の間に雛たちの外貌や行動に大きな変化が確認されたため報告する。

保護の経緯

2021 年 7 月 11 日早朝、広島県北広島町八幡の臥龍山中腹にある腐朽した枯木が倒壊した。当該木にはアカショウビンのペアが営巣し、育雛中であった。翌 7 月 12 日、情報を受けた上野が北広島町からの依頼で現場を確認し、生存している雛 3 羽と斃死した雛 1 羽を発見・回収し、生存個体を広島市安佐動物公園に保護・収容した。さらに翌 13 日、もう 1 羽の雛を発見・保護した。保護に関係する捕獲は、北広島町の許可証（鳥獣の捕獲等）3 北農第 4 号に基づき実施した。保護した雛の健全な生育を最優先としたため、個体に負担のかかる体重や各部の計測は行なわないこととした。

観察結果

7 月 12 日の保護直後の雛たちは全身の羽毛が羽鞘に包まれ、棘状を呈しており全身がハリネズミのような様相をしていた（図版 1-A）。体色は喉から腹面全体が淡黄色、頭部から背面全体が黒褐色を呈していた。また、踵を地面につけた状態で、体躯部を直立させた姿勢を保っていた。試しに雛たちを少し広い箱に入れると、後ずさりしながら移動し、壁面にたどり着くと、複数羽で身を寄せ合うようにして落ちていた。そのため、少し雛の大きさ・数に対し相対的に狭く、身動きの取り辛い窮屈目の段ボール製の育雛箱 W200mm × D250mm × H200mm に、樹洞内を模した形状になるよう、床と壁面にタオルをあてがい、その内側にペットシーツを敷き重ね、27℃に保温した保育器内に収容した。雛たちは保護時までの体温低下と、営巣木倒壊時に受けた衝撃などで個体の活性に差異が認められたものの、与えた餌に対し一様に反応した。給餌は、トノサマガエル、ジャンボミールワーム、フタ

ホシコオロギ、ピンクマウスを織り交ぜながら、不足分を適宜馬肉で補った。保護後の経過は、概ね良好であったが、7月14日朝、12日に収容した1羽の死亡を確認した。

7月12日の収容時から7月15日まで、すべての個体において、羽ばたく様子は認められなかった。

7月16日、保護4日目。朝、1羽の羽鞘が、頭部を除き、全て剥がれ落ち、全身を正羽が覆っていた（図版2-A）。なお、姿勢は前日までと同じ直立であった。同日、夕方までに、頭部の羽鞘が剥がれ落ち、前傾姿勢となり、収容していた箱の縁を趾でしっかりと掴み、止まっていた。他の個体も、翌17日、翌々18日に同様に羽鞘が剥がれ、前傾姿勢となり、箱内に戻ることは無くなった。箱に戻らなくなった個体から随時、止まり木を備えたケージでの飼育に切り替えた（図版2-B）。同時に保温は中止した。

なお、周辺域における観察者からの聞き取り情報として、6月30日に親鳥によって、巣穴から卵殻が運び出される様子が観察されている。

考察

死亡個体を含め5羽の雛が回収されたことから、1クラッチ5卵と考えられ、上野ほか（2001）が報告した同地域での巣立ち数と一致した。

巣立ち前に保護された雛たちは、すべての個体が直立姿勢を維持していた。矢野・上田（2005）によると亜種リュウキュウアカショウビン *Halcyon coromanda bangsi* の4羽の雛が巣立った後に計測した産室の奥行は17.7cm、幅が15.7cmと報告されている。この広さではアカショウビンの巣立ち前の雛が複数で存在するには、直立の姿勢でいることが必須と考えられる。本例の雛たちも、狭い樹洞内において直立姿勢を取っていたと推察され、樹洞の狭い空間に対する適応と考えられる。

巣立ち前の雛たちの羽毛はすべて羽鞘に守られた棘状を呈していた。羽鞘は個体ごとに一晩のうちにほぼ全身から一気に剥がれ落ちた。また、各々同日のうちに、直立していた姿勢が前傾となり、樹洞を模した育雛箱に戻らなくなった。野外における巣立ちと判断することができる。2020年に撮影された巣立ち直後の個体の写真では、頭部と尾羽の一部にのみ羽鞘が認められ、姿勢も成鳥と同じ前傾姿勢であった（図版2-C）。これらのことから、巣立ちするタイミングで羽鞘が剥落したものと推測され、これも狭い樹洞内で羽毛を痛めないための適応と考えられる。これらの特徴は、同様の繁殖生態を持つカワセミ科の鳥類に共通のものと想定されるが、カワセミ *Alcedo atthis* の飼育下繁殖例の報告（武田ほか1989）ではこのことに触れられていない。また、ワライカワセミ *Dacelo novaeguineae* の飼育下繁殖例において、羽鞘に包まれた羽毛に覆われた状態の雛が確認されているものの、羽鞘の剥落と巣立ちタイミングについては触れられていない（戸田2011）。

なお、巣立ち直前まで風切り羽根を含むすべての羽毛は羽鞘に包まれた棘状を呈しており、狭い樹洞の中で、翼に風をはらんでの羽ばたきなどの飛翔練習ができていないはずである。しかし、上野ほか（2001）は巣立ち直後の雛にかなりの飛翔力があると記録している。これも、狭い樹洞内で生育するシステムに対する適応の一つと考えられる。

雛3羽の羽鞘の剥落には各1日の時間差が存在した。つまり、巣立ちに時間差、ひいては抱卵開始時期に時間差があったと判断することができ、産卵と同時に抱卵を始めている順次抱卵であると考えられる。

前年の同所での巣立ち直後の雛は、頭部と尾羽の一部に羽鞘が残った状態で観察されている（図版2-C）。羽鞘の多くが剥がれ落ち、野外での巣立ち雛同様の様相を呈していた7月16日が、最初の1羽の巣立ち日と推測できる。他2羽もそれぞれ、17日、18日が巣立ち日と考えられる。本例、営巣木での親鳥による卵殻の廃棄が観察された6月30日が孵化日と考えられるため、孵化から巣立ちまでの日数は最短で16日。最長では18日と推測される。しかし、営巣木の倒壊時に死亡した個体もあるため、確定的ではない。矢野・上田（2005）は、リュウキュウアカショウビンにおいて6日齢程度の雛を観察後、11~12日で巣立ちを確認している。また植村・浜地（2020）も宮古島での観察例として育雛日数を17日としており、本例における巣立ちのタイミングは、正常範囲であったと考えられる。

謝辞

アカショウビンの営巣・育雛を見守ってくださっていた方々から、営巣木倒壊の情報や、育雛中の親鳥に関する情報をいただいた。また、森口龍人氏には貴重な巣立ち個体の写真をいただいた。この場を借り感謝の意を表します。

引用文献

武田 芳男・愛甲 重成・山口 仁 (1989) 豊橋市動物園におけるカワセミの繁殖について. 動物園水族館雑誌, 31 (4): 121-124

戸田 文恵 (2011) ワライカワセミの繁殖. さえずり, 12 (3): 5

植村 慎吾・浜地 歩 (2020) アカショウビン. Bird Research News, 17 (5): 1-2

上野 吉雄・河津 功・保井 浩・小柴 正記 (2001) 広島県臥龍山におけるアカショウビンの繁殖生態. 高原の自然史, 6:59-75

矢野 晴隆・上田 恵介 (2005) リュウキュウアカショウビンによる発泡スチロール製人工営巣木の利用. 日本鳥学会誌, 54 (19): 49-51

図版 1



A: 保護収容直後のアカショウビンの雛 2021年7月12日撮影
全身の羽毛はすべて羽鞘に包まれた棘状を呈している。身体を寄せ合い、踵を床に着け、直立の姿勢をとっている。



A : 1羽だけ羽鞘が落ち、体躯部を正羽が覆っている。

2021年7月16日撮影

B : 巣立ち後の雛

2021年7月17日撮影

7月16日巣立ちの雛(奥)と、巣立ち当日(7月17日)の雛(手前)は、それぞれ止まり木を趾で握って体を支えており、前傾姿勢をとっている。

C : 野外での巣立ち直後の様子。早朝に巣立った後、午前中に撮影された

2020年8月18日 森口龍人氏 撮影